

# 書

# 香

## 大谷大学図書館報

第20号

平成15年(2003)2月28日  
大谷大学図書館 発行  
〒603-8143 京都市北区小山上総町  
TEL. 075-411-8123

### 目 次

人との出会い・本との出会い…………… 1	「大蔵会」の伝統を憶う…………… 11
真宗世界の常識―林山・楠丘文庫のこと…………… 3	新図書館開館の軌跡…………… 14
大谷瑩誠と神田喜一郎と…………… 5	図書館日誌…………… 16
山東東平洪頂山北朝摩崖刻経拓本…………… 8	

## 人との出会い・本との出会い

高 井 康 弘 (助教授・社会学／文化人類学)

このところ私の1年は大きく二つの季節に分かれている。ひとつは大谷大学の構内を右往左往している秋冬春、もうひとつはタイやラオスのあちこちを旅している夏である。「右往左往」や「旅」と書いたように、いずれにせよ、あまりじっとしていない。大学では授業や他の業務であたふたと時を過ごし、タイやラオスの日々は、短期間にできるだけデータを集めようと、さまざまな人と会って聞き取りをしたり、会話しているうちに過ぎてゆく。大学での諸業務も研究上のフィールドワークも、それなりの課題やテーマがあって行なうのだが、人と会うなかで新たな用件や発見が生じ、次へと展開してゆく。予定や計画はあってないようなものである。

そして、こうした人との出会いは、しばし

ば本との出会いにつながっている。たとえば、農村の人たちとの会話で気になった事柄について、現地の研究者や官庁の役人に話をしたら、彼らがそれに関わる文献について教えてくれるといった具合である。また、本でいろいろな情報を得て、それに関わる人に会いに行くといった具合である。

私のばあい、タイ・ラオスでの日々の大半は、地方農村の現場調査に費やしてしまう。しかし、上記のような経緯のなかで必要が生じて、大学や官庁附属の図書館に何日かは行く。タイのたいていの図書館は、パスポートさえ預ければ、閲覧や一時貸出しサービスが利用できるし、専門の職員が資料探しを親切に助けてくれる。大学図書館は毎日遅くまで開館しているし、データ・ベース化も進んで



チュラーロンコーン大学中央図書館

おり、パソコンによる検索も比較的容易にできるようになっている。おまけにコピー・サービスが充実しているので、必要な資料を簡単に手に入れることができる。

目的の資料があっさりと見つければ、館内を探索する時間的精神的ゆとりが生じる。開架棚の谷間を散策したり、積まれている雑誌のバックナンバーをひっくり返したり、備え付けのパソコンに適当にキーワードを入れて検索すれば、いろいろな発見がある。こうした機会に偶然副次的に得た資料や図書の方が結果的に役に立つことも多い。蔵書の傾向や特色に思いを向けたりすることもある。

考えてみれば、図書館はボーッと休憩するのに格好の空間でもある。お金がかからないし、比較的静かで安全である。学生たちの様子を間近にみることでできる隠れた観光スポットと言っても良い。安価で美味しい食堂が付属していることも多いので、おなかが減っても心配ない。バンコクのチュラーロンコーン大学の中央図書館などはお奨めである(ただし、サンダルばきでは門前払いになる)。

夏が終わり、大谷大学に戻ると、響流館を横目に、聞思館・博綜館・1号館を往復する日々が始まる。他の同僚もなんだかやたらと忙しそうだし、学生も忙しくしている。なかなか自然には大学図書館に足は向かないし、入館してもそそくさと用件のみを済ませて退館しがちになる。図書館を迅速簡便な資料調達の面でのみ利用しているように思う。

ただし、そんな私でも短時間の在館中に、なんらかの発見を副次的にする。こんな本があったのかと、選書関係者の教育的配慮を思ったりする。日頃教室でみかける学生が読書したり作業したりしているのをみかけると、「この子にはこんな側面があったのか」と少し理解が深まった気になる。毎日のように長時間、大学図書館や総合研究室を利用している学生が本学にもそれなりにいることにも気づく。「図書館の虫」になれない私は、彼らに敬意の念を覚える。

しかし、短時間の在館者が、図書館で印象に残る濃縮された体験を得る可能性もかなりあると思う。そこは他と異なる時空間である。先学の知的営みを文字の連なりに封じ込めたタイム・カプセルともいえる書物が群れをなして息づいている空間に身を置いたとき、自分が外界の時間やモノの流れから遊離したような奇妙な感覚になったことはないだろうか? こうした違和感の体験が貴重であると思う。日常を相対化するきっかけとなる、なんらかの発見を学生にしてもらい、自らの日常を問うてもらうことが大学の大きな存在意義だとすれば、図書館はそれにうってつけの場であろう。講義やゼミなど「人との出会い」が、本との出会い・図書館との出会いに繋がる無理のないありようを、一教員として模索したい。



本学図書館風景